



2011年度大学主催春季人権問題講演会

「比較しない」三原則

～無理せず・卑下せず・押し付けず・カミングアウトから見てきた私的幸福論

(ミュージシャン)

笹野みちる

おはようございます。はじめまして、笹野です。今日はこんな朝早くから来ていただいて。私も大学を卒業してから20年以上経ちますが、1限目というとはほとんど寝ていたイメージがあります。勉強して疲れている人もいると思うので眠いなと思ったら寝てください。大丈夫です。寝ていてもサブリミナルに魂が伝わってくればいいので。

今日はほとんど自分の話しかしないので、気楽に聞いてもらえればなと思います。レズビアンが来るぞということで、もしかしたらすごく興味津々で、どんな女が来るんだろうという風に思ってくれた人もいられるかもしれませんが、身近に同性愛者、セクシュアルマイノリティの友達がいるよ、あるいは自分がそうですという人はいらっしゃいますか。友達がいる、自分がそうだ、どちらでもいいです。どれくらいいますか。前の方は結構多いですね。後ろの方は周りもみんなヘテロ（ヘテロセクシャル、異性愛者）みたいな感じですかね。わかりました。ありがとうございます。

みなさんのイメージがどんなものかわからないですけれども、一言で言うと本当に色々あります。レズビアンイメージも昔はかなり差別的で、固定観念がすごかったというか、その昔は大体「レズ」というとポルノだとか即セックスに結びつくようなイメージで、そ

れで気持ち悪いという印象が流通していた部分があったと思います。そもそも私がカミングアウトした理由のひとつは、なんでこんな風な思い込みが蔓延しているんやろう、ということでした。

私はパートナーも女性だし、「レズビアン」というものに入るけれど、私は私だから、こういう私というのが見えるようなところに行って色々な話をしたり姿を見てもらったりすることで、頭の中のイメージと現実との調整をしてもらう。表に出て行かないとみなさんの中にあるイメージはずっと固まったままですけど、実際に会ってしゃべったり友達になったりすると否が応でも変わりますよね。例えばめっちゃくちや気が合うと思っていた友達が世の中で差別されているということに気が付いた時、みなさんどうしますか。なんだ、こいつ差別されている奴だったのか、だったら友達やめようということにはならないですね。そうになったら真剣に友達の話を知りたりして、偏見を持つ世の中の方が勘違いしているんだなと理解して、そちら側を変えていこうとする。人と人が会うと自然にそういうことが起こってくるんじゃないかと思っています。それがカミングアウトの意味だと思っていますが、「なんでカミングアウトなんかするの」と聞かれることもよくありました。

なぜカミングアウトしたか

私がレズビアンであることをカミングアウトしたのは、1995年です。もうだいぶ前になります。その頃、本を出したり、テレビやラジオ、新聞にもたくさん出ました。その時も、「なんでカミングアウトするの。わざわざそんなことしなくても別にいいやん」とか、「露悪趣味なんちゃうの」と言われることがありました。でも、そうじゃないんですね。世間一般に共通の固まったイメージがある限りは本当の意味で友達になりにくい。けれど、生身の私が入り込んで行って、「私ってこういう奴で、親はこんなんで、こんな環境で育って、京都に住んで、中高は女子校で、こんなことに悩んで、こんな風な感じで人を好きになったりとかしてんやんか」という、ありのままの自分を出した時に、初めて固定したイメージというのが崩れる。それでようやく友達になれるところもあると思うんです。

やっぱり「モヤモヤ」が邪魔ですから、そのモヤモヤをまずフツと吹く感じのイメージで表に出て、「私レズビアンですよ」ということはすごく意味のあることじゃないかと思っていました。その時は使命感に燃えて、モヤモヤ潰しというのが楽しくて仕方がないという感じでした。

これは、今は絶版なんですけど、『Coming OUT!』という本です。幻冬舎アウトロー文庫から出ています。今日はこの講演のために久々にこの本を読み返しました。数年振りに最初から最後まで読んで、顔から火が出るほど恥ずかしかったというか、結構赤裸々に自分のことを書いていて、今の自分とはまた違う自分がいたりします。これを書いたのは20代後半ですけど、こんなことを考えていたの

かと。この時に自分の過去を振り返って語っているエピソードも今は忘れていたりするんですよね。そういう意味でも人間って変わるんだなと、改めて思いました。20歳の頃が感じがらめになっていた、偏見もモヤモヤもそうですけど、そういうのって時が経ったら変わるんだなということを実感して、それだけでも希望だなと思います。そんな感じで、私は学者でも評論家でも何でもないので、勉強の話は全然できません。なので、自分の経験を中心に話したいと思います。

マイノリティと人権

とは言うものの、実はここ10日あまりの間にセクシュアルマイノリティにとって非常に画期的なニュースがふたつほど飛び込んできました。ご存知ですか。国際的なニュースです。ひとつは6月17日、国連の人権理事会でLGBTの人権に関する決議がありました。LGBTってわかりますか。Lというのはレズビアン、Gはゲイ、Bはバイセクシュアル、両性愛者です。そして、Tはトランスジェンダー、日本では性同一性障害が注目されていますが、性別や性別に基づく役割に違和感を持つ人々を指します。そういったセクシュアルマイノリティの人達への暴力や差別を非難する決議案というのが、23対19で国連の人権理事会で可決されたんです。これはかなり画期的なことだそうです。

世界には同性愛者だというだけで死刑になる国もあります。最近ではアフリカのウガンダでも同性愛者を死刑にする法案が提出されて、その時にはツイッターなどで情報が瞬時に拡散されて、ウガンダに対する非難声明や反対署名が世界から大量に寄せられて、法案が可決されずに済んだという話もありまし

た。そういう流れの中で、国連がセクシュアルマイノリティの問題は人権問題だということにお墨付きを与えたことになります。

人権問題というのは結局、そんなに簡単に死刑になんかできませんよ、ということですよ。逆に言えば、死刑にまでされるような存在だったんだということが、私には大きなショックでした。個人的なことを言うと、私は中学の頃から女子校で、中学1年の時から憧れる相手は全員女の子でしたが、でも、そこで引け目みたいなものはまったく感じずに育ちました。それなのに、世界では死刑になる国もある。今までそれが放置されてきたというのは、やっぱりすごく悲しいことだなと思いました。

人権という言葉はすごく難しい面もあって、西洋の価値観の押し付けなんじゃないかという話もあると思います。だけど、どこであっても、自分自身が生まれつきの自分らしさを出していくだけで殺されてしまう、というのはあまりに悲しすぎるだろうと。例えば、思考実験をしてみてください。たかだか性のことですよ。自分が異性愛者だというだけで、「お前は死刑だ」と言われて、死なないといけないという星に行ったら。マイノリティだからしょうがない、死んでもしょうがないとは思えないですよ。そういう意味で、人権という言葉には深い意味があるんじゃないかな、と改めて思いました。

そして今度は6月24日のことですが、みなさん知っていますか。アメリカのニューヨーク州で同性間の結婚が承認されたんです。下院は前から通っていたんですが、上院でも可決して、ニューヨーク州の知事もそれに署名をして、晴れてニューヨーク州ではセクシュアルマイノリティの結婚が合法化されたんです。アメリカでは6州目らしいんですけど、

ニューヨークってやっぱり一番影響力のある州でしょう。そこで通ったということが私は本当に嬉しくて、やったーと思っていたら、すごく喜んでいたのは私だけじゃなくて、レディ・ガガも涙を流して喜んでいたそうです。私たちの正義と平等の戦いがようやく叶ったのよとツイートしていたそうで、すごいなと思いました。

最近そういう感じで結構セクシュアルマイノリティにとって嬉しいニュースが立て続けにあったんですけども、結局セクシュアルマイノリティにとって嬉しいニュースというのはみんなにとって嬉しいニュースだと思いたいというか、そういう思いがあったので、これはぜひお知らせしておきたいなと思って紹介させてもらいました。

落ち着かない家庭～冷めた小学生時代

自分の話に戻りますが、こんな格好をしているところのままそっちの席に入ってもあまり違和感がないように思われるかもしれませんが、今年44歳になります。京都生まれの京都育ちで、中学に入ったのが1980年でした。母親は大学で憲法を教えていました。大学教授の後には参議院議員にまでなってしまう人なんですけれども、世間では「人権派議員」の顔を持つ母に育てられたんです。父親は高校の数学教師でしたが、頭の中はものすごく文系の人で、源氏物語を読むのが好き、そういうタイプでした。

その二人の間では、この人たちなんて結婚したのか意味が分からないというくらい普段から大喧嘩。大喧嘩といっても父がちよっとしょうもないことをして、それに対して母が怒鳴り散らす、それに対して父が一言反論しようものなら更にその百倍くらいで母が怒鳴

り返す、そんなところで育ちました。物心ついた時から周りにはお手伝いさんが何人かいて、それだけ言うとどんないいところの子やねんと聞こえますけど、そうではなくて、母が教えている大学の学生でちょっと色々と言語があって苦学生だというような女子学生たちを何人が毎年住み込みで下宿させてベビーシッターをさせていた。それで家の中はいつもワサワサしているし、両親は怒鳴り散らしているし、ちょっと落ち着かない家だな、と感じながら育ちました。

そして小学校に入るわけですけども、どうも人間関係がうまくいかないことが多い。男の子たちがやたらちょっかいを出したり、意地悪をしてくる。かといって、別に私は全然こたえないんです。「しょうもないことをするな。でも所詮あと何年かでここともおさらばだしな」くらいの感じで思っている。そういうところのある子でした。そして中学に入る時に親から、「あんたどうする。公立に行くか、それとも受験でもするか」と言われた時に、公立に行ったら男子とそのまま行くし、それも鬱陶しいし嫌だな。それならもう受験するわと。私の両親はどちらも同志社で、同志社の学園祭に小学生の頃に連れられて行ったりして雰囲気もなんとなく好きだったので、そしたら同志社に行くわ、頑張るわということで、受験することを決めました。

ところが、同志社の共学の中学校はその頃すごく偏差値が高くて行けず、それなら女子校で頑張るということで、なんとかギリギリ滑り込んだという感じでした。だからその頃はなんで女子校を選んだかという、自分が行けるギリギリのところだったから、という程度の理由でした。

女子校入学～人間武者修行の始まり

小学生の間は多少は勉強もできていたんでしょうね。男の子から何をされてもフーンという感じで余裕で過ごしていたんですが、同女の中学に入ったら世界がガラッと変わって、めちゃくちゃ優秀な女の子ばかり。優秀というか、それまで見たこともないような変わった子がいっぱいいました。同女は中学から私服です。特に時代はバブルですから、その頃はパステルカラーの服が流行っていて、そんなパステルカラーとかボーダーとか派手なものを着た子たちがいっぱい、とにかく華やかでした。そして元気が溢れている人たちばかりで、最初は気圧されて、「うわ、なんだここは！」と思っていたんですけども、その中でようやく自分の中の眠っていた人間が目覚めていきました。

中学・高校と一貫教育、そのまま大学もエスカレーター式で行けるので、受験のストレスもなかった。だから学校の中でやることといたら、完全に人間関係しかなかったんですね。本当にそれが楽しくて。でも最初は非常に苦労しました。小学校の時に人間関係の「いろは」が形成されていないので、女子校に入った時に本当にどんくさいことをいっぱいやりました。自分でもわからないんですけど、中1の時にすごく好きになった子がいても、どういう風に友達関係を円満にやってくかというのがわからない。携帯電話みたいにやり取りをするようなツールもないわけです。80年代にはまだ学生はそんなものを持っていません。メールもツイッターももちろんない。パソコン自体、まだ家にほとんどない頃です。そういう時だから肉弾戦です。毎日がガチンコ勝負みたいな感じでした。

今から思い出しても笑えますけど、まず

ごく懂れる子がいて、その子は頭のいい子だったりして、私はノートを書くのが追いつかないから、中間とか期末の一週間くらい前になったらその子に頼んでノートを借りてくるんです。ノートを借りて何をするかと思ったら、一応写すんですけど、一生懸命その筆跡を真似るとか。今から思ったらストーカーじみた感じですけど、まずその子に近付きたいという感じですね。これは忘れもしない中1の頃です。一生懸命筆跡を真似て、何年か経って気が付いたら何種類かの筆跡が書けるようになっている、そんな感じで過ごすんですけど、とにかく毎年毎年体当たりでした。

体当たりで学んだ「引きの美学」

その時にひとつ学んだことで、本当に他愛もないことなんですけれども、最初は仲良かったんだけど段々避けられるな、なんでやろうと思うことがありました。それで中3の時に悟った人間関係の真理があって、これは「引きの美学」だと。まず引くんです。いくらガチンコだといっても、押して押して行ったら向こうは引いてしまう。そこで何をするかと思ったら、まず自分のことを考えるんだと思ったんです。日記を書いて、自分の内面にバックして行って、その時、今日の自分は何を思ったかとか、自分がやってしまったことで、しまった、失敗したと思うことあるでしょう。言い過ぎたなとか。そういうことを家に帰って日記に書き連ねていると、内省する時間になるんですね。中3からやり始めて、高校までずっと日記を書いていました。そういう風にして現場から引いて、自分の中のチェック作業みたいなことを日記でやり始めると、不思議なことに人間関係がうまくい

き始めたりして、なんか不思議やなど。そういうことを学んだり、それも本を読んだわけでもなく体で覚えていった、そんな毎日でした。

スペシャリストの呪縛～描けなかった将来

中3の時にそんな感じで人間武者修行をして、それなりに友達も親友もできてきて、私はもうすぐ高校か、それで大学に行くんだな、私は何になりたいんだろうということを考え始めたんです。その時に日記に色々なことを書き連ねているんですけど、結局自分の母親というのが、言ってみればものすごい権力者だったわけですね。大学教授で。私に対しても、男に食わせてもらうような人生は送るんじゃないよという感じでした。物心付いた時から洗脳されていたような子でしたから、そうだなと思って、食わせてもらっていてもいつか天変地異が起きたりして自分で生きていけないといけない時がくるかもしれない。そんな時に会社があるとか思っていたらあかんわ。自分で這ってでも生きていけるようなものを身につけないとあかんわと、サバイバルしないとだめだみたいな気にさせられているんです。だから色々書き連ねました。スペシャリストにならないといけないと。

日記に書いている悩みの箇条書きで、一個一個職業をあげていくんです。弁護士はどうだろうと書いてみて考えるんです。私はそんなに頭がよくないし無理だろう、ペケとかするんです。女優はどうだろう。私は演技もできないし無理だろう、ペケ。その時に、ミュージシャンはどうだろうと書いているんです。音楽は好きだけど、どうも作曲能力がないから無理だろう、ペケと書いていまし

た。結局私は何になりたいのかわからないな…というようなことを書いていました。

中3の夏にバンドを始めた

ところが中3の夏休み前くらい、その頃すごくおもしろい友達がいる、その子がいきなり「なあ、バンド組まへん」と言ってきたんです。別に高校に入って何をやる当てもなかったから、深く考えずに、「いいよ、やってみようか」と。私は母のすごく抑圧的な、権威主義的な教育のおかげで3歳の頃からピアノとバイオリンをやらされていたんです。その時もやっていたんですけど、一切やる気がなかったからバイオリンはものすごく下手で、でも一応弦が4本あるからベースだったらできるかもと思って、「私、ベースやるわ」と言ってやり始めたら、ベースの弦の並びとバイオリンの弦の並びは音階が逆になっています。そんないい加減なことではベースをやって、バンドをやり始めます。ボーカルはその時非常に目立っている子で、漫画がすごくうまい子だったんです。その子も弾けていて、学校から突然いなくなってどこか遊びに行ってしまうような子だったんですけど、でも人気があって、後輩からもキャーとか言われている子で、ボーカルはその子にしよう。私はあまり深く考えずに、「いいよ、そうしようか」と。そんな感じでメンバーが決まっていきました。

ところがそのボーカルの子が本当にぶっ飛んでいる子だったので、学校に来なくなってしまったんです。今思うとそれはぶっ飛んでいるというだけじゃなくて、その子なりに悩みを抱えていて、いわゆる登校拒否だったんですけど。もう学校に来ない、どうする、え

らいこっちゃ。その子の心配じゃないんです、その頃は。バンドができないからどうするみたいな感じ。その時、私は政治家のような感じで「今や」と思って、家に帰って、その頃流行っていたハードロックの曲があったんですけど、そのレコードに合わせてカセットテープに自分の歌を吹き込んだんです。それで学校に持って行って、バンドの中のリーダー格だった子に、「私、なんとなく家でこんな感じで歌ってみたんやけど、聞いてくれる」とか言って聞かせたんです。そうしたら、「意外といいやん。ほんなら、とりあえずベース兼ボーカルでやりいな」と言われて、潜在的に私は虎視眈々とボーカルを狙っていたんだなとその時に気付いたんですけど、そんな感じで本当に深く考えずに流れの中でボーカルになって、高校3年間やっていくんです。

抑圧のない「女子校」という空間

女子校の高校3年間の体験というのは今の私を作ったなと思う原点なんですけれども、何がおもしろかったかということ、とにかく文化祭がすごくおもしろかったです。女子校って結局全部女子でしょう。当たり前ですけど。文化祭ってかなり大きな、色々なことをやらないといけないうイベントじゃないですか。パネルを釘で打ちつけないといけないう。針金で吊下げないといけないう。そういう作業も当然全部女子なんです。力作業も全部女子。ものを考えていく、企画していくのも女子。体を動かすのも女子。先生と揉めた、それを交渉しに行くのも全部女子。団交みたいなものですよ。理論武装するのも女子。何もかも女子なんです。それが本当におもしろかったです。

大学に入ってから思ったんですけど、同志社大学って要は同志社女子、共学、香里も今は共学になったのかな。その頃は男子校だったんですけど、国際とか色々なところからのエスカレーターの子たちが入ってくるんですけど、明らかに同志社の下から来る子の色が違うんです。どう見てもクラスの中で無敵に振舞っているのが女子校出身なんです。学食でも我が物顔で大きな声でしゃべっている。そして周りの男子学生からなんか嫌な眼で見られている。それも女子高出身者。だけどまったくどこ吹く風という感じの、そういうような人格が醸成されているんですよね。

それに反して共学から入って来た女の子は大学に入っても男子の言うしょうもない冗談にハハって笑ってあげるようなところがある。そういうことは女子校の子は一切しないんです。「あほちゃうの」とか平気で言うんです。そういうのが繰り返されているんですけど、共学の子は18歳にして男がいた時の女子としての処世術みたいなものが刷り込まれてうまくやれている。女子校の子はまったくうまくやれないんです。我が道を行って、爆走していくタイプ。そういうのができてくると驚きました。

それは本当に気味のいいこととしてエンジョイしていたというか、私は派手なエンジョイ派の子とはちょっと違ったところにいたんですけど、とにかくそういう空気があるんですよね。自分自身の中で抑圧するものがひとつもない、社会的に他者から抑圧されて他者に譲り渡す部分が、自分の中のパワーにおいて全くないんです。その楽しさというか心地よさを女子高生活の中で自分自身を使って思いっきり伸び伸び実験できる、そういう3年間でした。そんな中でバンドをしていると、やっぱり女子校の人気者みたいになって

いくわけです。

「バブル」と放課後の同級生たち

84年から86年というのが私の高校3年間にあたるんですけども、バブルの真っ盛りで、今はそんな人ほとんどいないですけど、80年代にはワンレン、ボディコンという言葉があったんです。知っていますか。ワンレングス、ボディコンシャス。髪の毛がみんな長くて、こういう風に少し横のところで分けていて。ものすごく鬱陶しい髪型なわけです。当時高3の女子高生はどういう風にして授業を受けていたかという、みんな頭が傾いているんですね。服はぴったりして、しかも黒。カラス族と言われていた頃です。ぴったりかダボダボかどっちか。ダボダボも真っ黒で、しかも穴が空いていたりして一見ポロポロの服。暑苦しいし汚いんだけど、それがDCブランドで大流行りで、みんなそんな服を着ていました。結構高いんですよ。2万円とか1万円は下らないような値段の服を、放課後に、京都のBALというところがあるんですけど、そこに行ってバンバン買って帰っていくというような、恐ろしい、高校生でさえもそんな時代でした。

ワンレン、ボディコンというのは要はひとつの女としての「型」なんですよ。男はテクノカット、ニューウェーブカットでした。どういうものかという、安全地帯の玉置さんが昔その髪型でした。耳の横が真っ直ぐにピシッと揃っているんです。もみあげは全部剃って真っ直ぐ。そして横のところが立っていて、ちょっと横分け。男はみんなそんな形です。チェッカーズのフミヤも昔はそんな髪型をしていました。それもすごくジェンダーとしてはっきり分かれているわけです。男は

ニューウェーブカット、女はワンレン、ボディコン。

私にはそれが窮屈で。もともと物心ついた頃からスカートを履くのが嫌でした。親は人権派と言っておきながらなぜか私にはかわいいレースの服を着せたがるという矛盾に満ちたところがある人だったので、それにものすごく抵抗していたこともあり、女らしい格好をするのがすごく嫌だったんです。なので、その頃私はテクノカットにしていました。当時の写真を見るとすごく恥ずかしいんですけど。でも、そんな感じの女の子たちも結構いっぱいいたんですよ。ボーイッシュな感じの子もいっぱいいて、そういう子はバンドのボーカルをしたりしていました。

自分はそういうようなことをやりつつも、周りの子が放課後になったらトイレに入ってガーッと化粧して、そのまま京都の三条木屋町に行って、マハラジャというディスコに消えていくという、そんな風景を見ていて、なんで私はこんなに寂しいんだろうと思っていました。嫌というより寂しかったんです。今の今までバンドで練習していたのに、それが終わると突然化粧して歓楽街に消えていく、それがなんだか知らないけど寂しいなと思って、その寂しさはなんだろうかと、割と自覚的に考えたことがありました。その時にみんな無理やり背伸びしているんじゃないかなと思ったんです。もちろん好きでやっているとは思んですけど、なんかおかしい。あまりにも型にはまり過ぎているんじゃないかなと思って。

時代の空気というものがあって、特にバブルのときは浮かれた感じで、非常に典型的なグッズがあったわけです。カフェバーとかビリヤードとか。そういう象徴的な、物質的な「80年代ってこれよね」みたいなものがザッ

と揃って、みんながそれに飛びついているというのがものすごく寂しかった。学校の中では不思議とそれが無いんですよね。クラスの中ではそういう空気がないのに、一步外に出たらみんなそういうところに吸収されていく。それがすごく寂しくて、その時にあえて私は子どもに戻りたいと思ったことがありました。

卒業コンサートにぶつけた想い

それは高3の時なんですけど、今この言葉が発するのは非常に恥ずかしいですが、「子どもに戻る」ということをテーマに、何組かバンドで卒業のコンサートというものを企画しました。同志社の栄光館というパイプオルガンのある由緒正しき古い講堂があるんですが、そこで卒業コンサートをやらせてもらうことになりました。その時に考えたイベントのタイトル、それが何だったかというところ「Never Give Up! 否軽薄」だったんです。軽薄になるもんか、ということです。思い出すとすごく恥ずかしいんですけど、忘れもしない、「Never Give Up! 否軽薄」と横断幕に書いてバーンと貼ったりして、そこでマドンナなんかのコピーバンドをするという不思議な空間ができたんです。

何がやりたかったんだろうと今から思うと、結局自分自身の本当の気持ちをどれだけ大事にするか。思春期というのはその時しかないでしょう。中3から高3、その6年間しかないのに、それをすっ飛ばして大人になったらいくらでも行けるところにみんながどんどん出て行ってしまふのがすごく寂しかったのは、結局そこに出て行ったらもう一生取り返せないものを、その時期に完全に捨ててしまっているんじゃないか、ということだし

た。

それが何かといえば、社会から与えられたツールとか、ディスコとかブランドとか、そういうことじゃなくて、本当に自分たちの人間関係の中で内側から出てくるパッションとか気付きですよ。そういうことが本当に大事だったし、それこそ女子高生活で教えてもらったものと思っていました。小学生の時、冷めていてどこかで突き放していたような自分と、女子校に入った時に初めてがっぴり組んだ時に出てくる気付き、それは本当に純粹さと言ってもいいようなものだと思うんですけども、そういうものが内側から出てくる。そのことを完全に無視して先に行ってしまうって絶対あかんやん！という、泣きたいくらいの気持ちがあったんです。その頃はなかなかうまく言語化できなかったんです。

そういう気持ちを私なりにぶつけて歌っていたのが、U2でした。今でもあるバンドですが、その頃のU2って本当にロックバンドだったんです。全然テクノっぽくなくて、魂の叫びなんですよ。それが大好きで、女子校で全員女子にも係わらずU2のコピーバンドをやっていました。女子高生活の3年目をそんなふうにごちました。

女子校の先生になりたかった

それで大学に行くんですけども、その頃私は何を考えていたかという、将来絶対母校に戻ってきて女子校の教師になりたいと思っていました。なぜそう思ったかという、自分自身が女子校の中学3年、高校3年の6年間の中で気付かせてもらった、純粹さやパッションみたいなものって本当にあるんだと。それに気付けるんだと。文化祭もすべ

て自分たちの力でやっていく。自分たちの頭で全部考える。悩みは全てシェアして、みんなに支えてもらって、放課後もずっと話して、それでも間に合わなくて帰りに阪急電車のホームの椅子に座って2時間、電車が通り過ぎるのを見ながらずっとしゃべって、それで掴んできた確かなものがある。そういうことが掴める時なんだな、女子校って、掴める場所なんだなと思ったんです。共学には共学のいいところが当然あるんだろうけれども、女子校はそれが本当に純粹な形で、女の子の中の可能性をエンパワメントできる、力付けることができる場所なんだと思ったんです。自分がそうだったから。

だから戻って行って、そういうことの手伝いができる教師になりたいと思って、めちゃくちゃ燃えていました。80年代中頃こんなに熱かった私ってすごいなと今でも思うんですけど。それで大学に入ったら最初から教職課程を取って結構勉強したんですけど、ただ勉強しているだけではだめだと。要は自己実現ですよ。自己実現というのはお題目だけ言っても伝わらない。具体的にはどういう場所でどういう風の実現できてきたのかといたら、私の場合は「バンド」だったんです。だから大学に入っても、めちゃ勉強はしたいけどバンドも絶対にやったるねんと。

それで4年間バンドをやって、大学のバンド生活でどんなことが待ち受けているかわからないけれども、そこで思い切りやって、色々なことを考えて、色々な場所でライブをして、「これだけ先生楽しんだで、おもしろいで」ということを本音で言えるようになりたかった。自分の実体験として思い切りやった上で、「楽しんだで、先生は。だからあんたらも楽しめるで。なんでもできるで」、そういうことを絶対言いたいと思って真剣にバ

ンドをやっていたんです。不思議な動機ですけど。もちろん歌は好きだったわけですけどね。だから普通にバンドをやっている子とはちょっと違う、ある意味異様なオーラがたぶん出ていたと思います。

突然開けたプロへの道

あれは大学1回生の暮れのあたりでした。ちょうどその頃バンドブームが始まりつつあって、色々なところにレコード会社の営業所がありました。そこらじゅうにアマチュアバンドがあったので、その子たちを見に行く宣伝担当の人達が大勢いたわけです。そのレコード会社のプロモーターの人にたまたま見つけられて、「なんやろ、この女の子は。恐ろしく真剣にU2を歌っている。こんな変な奴は見たことない」とたぶん思われて、それでビデオを撮られて、東京のビクターエンターテイメントという会社があるんですけど、そこの本社の方に送られて、見てみたら東京の方でもこんな不思議な熱さを放っている子はいないなということで話題になったらしくて。そこから何の因果か、中3の時に、自分には作曲能力がないから無理だろうな、ペケ、としていたそのミュージシャンへの切符が大学1回の終わりからちらつくようになったんです。大学2回になったら毎月ライブをしていたんですけど、毎回レコード会社の人があるようになりました。最初は1人だったのが2人になって、4人になってとおじさんたちの人数がだんだん増えてくるんです。ライブハウスの後ろでこんな感じで見ているんですよ。これはなんだ、ちょっと状況が変なことになってきたぞと思っていたら、正式にデビューしませんかという話がきたんです。

その時は本当に自分でも驚きました。要は、「スペシャリストにならなければ」という呪縛が自分の中で完全になくなっていた時期だったんです。特別な人になりたいとか、目立ちたいという気持ちですっきりなくなっていて、ただただ女子校という場にもう一度戻って先生になりたいという、その一心でした。そう思ってやり始めた途端、さっきの引きの美学じゃないですけど、すごく執着して悩んでいたことが、別の気付きでもってパーンと手放した後に向こうからやってきた。「そうか、こんなの別にたいしたことなかったんだな。こっち側の気付きの方が大事だったんだな」と捨ててしまうと因果なことにその捨てた方が実現するという、そういうからくりが人生にはあるんだなと思いました。

「プロになれるよ、あんたは」と言われて、その時に私も非常に複雑な気持ちになって悩みました。悩みましたけど、「プロになる」というようなことは、それこそがむしろにやりたい、なりたいたって、めちゃくちゃ執着してそれを目指したところでできるものでもないよな、と思ったんです。だけど今、自分が別の動機からではあるけれども、めちゃくちゃ頑張ってやっていたらそういう切符がきた。その時になんとなくやっぱり好奇心があったんですよ。正直な話。これも何かの縁かなと思ったんです。じゃあ、やってみようかなど。だから、「やったー、ついにこの切符を手にした」というのとはまた全然違う不思議なテンションでした。

その頃の日記に何て書いていたかという、「因果なことに自分は今プロになろうとしている。だけど、たぶん自分は東京に出て行ってデビューしたら絶対に悩むだろう。めちゃくちゃ悩むだろう。どんな悩みが待ち受けているかはわからないけれども、たぶんボ

ロポロになるかもわからない。でも、こういうチャンスというのはたぶん二度と訪れないし、何かの縁だろう。だから行ってみよう」、そういう感じのことを書いているんです。そういうことがあってデビューすることになりました。それが東京少年というバンドでした。

「東京少年」の個性と後日談

だから知らないですけど、そのバンドブームの中にあって、客観的に今から振り返っても、バンドとしてちょっと不思議なスタンスにあったというか。ガールポップという言葉がそのもう少し後に起こったりするんですけど、ボーイッシュな女の子が元気に歌を歌っているみたいな、そういうバンドはいくつかあったんです。一見そういうもののひとつに見えるんですけども、歌っている内容は学校のことが多いんです。それは自分自身が学校のリアリティで得てきた気付きを歌っているから当然学校の歌が多いんですけども、ただならぬ切実な感じで歌っていたんです。「元気に頑張ろう」というのとちょっと違う、「暗さ」を帯びていたバンドだったんですね。だからファンになってくれる人もややおもしろい人たちが多かった。

後日談なんですけど、7年後にカミングアウトをして東京少年が解散してから今度はソロでデビューすることになります。自分がレズビアンという自覚をした上で、本も出したわけなんですけど、その時になって東京少年時代のファンの人たちから続々と、「笹野さん、実は私もそうなんですよ」という手紙がいっぱいきて笑っちゃいました。だって当然、東京少年の頃は、「私はレズビアンなんですよ」なんてひとつも自覚的に言っていないし、自

分の中でもそういうことがまだ言語化できていない時でしたから。だけど、その頃の女子高の中で培ってきたものの中から生まれた歌詞の中に、何かレズビアニティというか、ちょっと難しい言葉ですけどね、レズビアン性というか、そういうものがちらついていて、そのことに非常に精神的にアンテナが触れた人たちが結構いた。人間ってアンテナがすごいなと思いました。そんな後日談もあるんですけども、ちょっと変わったバンドだったんです。

女として「化ける」ことを期待されて

日記で書いていた通りデビューしてみたら本当に想像を越えた辛さがありました。もともとはレコード会社の方も、それまでの私がどんな形で歌っているかを見たらうで、デビューさせているわけです。U2の初期に神への信仰をテーマにした歌があるんですが、そういうものを生真面目に、ボーイッシュな日本人の女の子が歌っている。それをわかってデビューさせてくれたわけなんですけれども、いざ音楽業界というところにデビューすると、やっぱりアーティストというカタレントが売れていくセオリーがあるんです。

それはどういうものかということ、最初は無垢さを非常に大事にする。ピュアな少年っぽい女の子、それが非常に魅力的だということがあるわけです。ところがそれは必ず化けてもらわなければ困る。無垢な少年っぽさというものは何年か経つと必ず化けて、セクシーさを放つ女性として一人前になっていく。それがアーティストとしての自然な見え方の変化で、そういうものが起こっていくにつれ人気は広がっていくという固定化されたイメージがあったんですね。女は化けるものだ、化

けさせないといかん、そのためにどうしたらいいか、ということが大真面目に会議されていたらしいです。普通は放っておいても女というのは化けていくのに、私の場合は1年経っても2年経っても全然化けない。こいつはちょっとまずいぞということで、色々言われました。「みちる、お前は恋愛してるんか」とか、その質問はほとんどセクハラやんというような、そういうことをされたりしました。私生活に何か問題があるんじゃないかくらいの感じでした。実はその時、私は男性と付き合っていたんですが、それでも、「化ける」ことはなかったんです。

このあたりは『Coming OUT!』に結構書いているんですが、私は元バスケットをはくのも嫌だったし、決め付けられるのも嫌だった。女子校の中で伸び伸び育ってきて、大学に入って初めて男が半分以上という空間に入った時に、恥ずかしいんですけど身構えていたんですよ。肩に力が入っていて、「私は丸めこまれへんで」、「近寄ってくるなよ」みたいな、そういう感じ。それ以前に、高校3年の時に女の子と恋愛をして失恋して、懲っていた時期があったから、男の子に対しても身構える気持ちがあった。でも、そういう風にしてると人間って不思議なもので、自分の中でキューっと凝縮していけばしていくほど人が寄ってくるという法則があって、奇特な男の子がいたんです。私が好きだった女の子に恋してしまった男の子がいて、だけどなかなか脈がないと、相談しに来たことがあったんです。「あいつってどんな奴なん。俺、あの子のこと好きなんやけど何か教えてくれへん」とか、そういうようなことから話が始まって、結局その子としゃべっているうちに、私が女子校の話とかを熱く語ったりしたのがおもしろかったみたいで、その子と結果

的には付き合うということがあったんです。

本質がやり過ごされる「男と女」

それが東京少年になっても続いていたわけなんですけど、とにかく「男と女」というところで話が片付いてしまうような関係がすごく嫌でした。ひとつおもしろい話があるんですけど、私が彼とめっちゃくちゃ喧嘩したことがあったんです。発端はしょうもない話で、待ち合わせに彼がかなり遅れて来たんです。1時間くらい遅れて来たので、めっちゃ怒って、「どういうことや。あんた何やと思ってんの」と言ったら、その時の謝り方がおかしい。理由がそれなりにあるわけだから、正直に寝坊したでも、忘れていたでもいいし、何か理由を言ってほしいわけですよ。理由を言った上で「ごめんな」と謝ってくれたらそれでいいんですけど、今でも覚えていますけど、彼の言い方というか、態度とか目線とか雰囲気とか全部なんですけど、「悪いことしたな、ごめんな」という感じなんです。「お前を守ってやれへんかったな」みたいな、そういう感じ。うまく言えないんですけど、女の子がすごくキーってなっているから、男の子はよしよししてしている感じですよ。[「わかった、わかった。ごめんな、悪かったな」]みたいな。

それがものすごく腹立ったんです。その時「ああ、この人とは繋がれへんな」という感じがしました。よしよしとされたらそれで、「ならいいよ」というような人も、もしかしたらいるかもしれないけど、私は本当に悲しくて、そういうことじゃないねんって。あんたがどんなことで私との約束がだめになったんかというのをただ本音で語ってほしいねんって。けれどもそれが語られない。ただた

だ悪かったなと。自分のしたことに対する誠実さがまったくないというか、自分自身の内面のからくりのようなこと、どういうことでこうなってしまったのかということを中心にみつめて、自分にシェアしてくれるということがまったくない。そのことが非常に悲しくて、男と女はこんな感じでやりすごされていくのかなということを感じてしまった。自分の魂と相手の魂というような、そういうところで人間は繋がれるわけじゃないんだということがすごく悲しかった。

挫折～バンド解散～京都へ

音楽業界で同じような形で経験したのは、それまで自分自身の魂に触れるような音楽を目指してきて、不器用かもしれないけどそれなりに形作ってきた自分のスタイルというものがあるわけなんです。そういうところを見られるんじゃないかと本当に表面的なことの手入れ、結局そのことだけなんです。そのことだけをどういう風に変えていくかということで、みんな騙されると売り手は思っているんですね。実際にそれで騙されてしまうところもユーザーの中にはあったと思うんです。でも、それはそれで機能していて、お金が回っていく。

結局女らしさやセクシーさなんて、スタイルじゃないですか。セクシーな女というのはこういう風なメイクで、こういう風な目線、こういう風な立ち居振る舞いでという、そういうことがすべて細かくやるときとあると思うんですね。それをいかに操作するかということで、みんなが騙されて行って、お金を払って、それで経済が回っている、という面がやっぱりある。そういうことを東京少年の時に感じてしまった。そのときの挫折は

大きかったですね。20歳そこそこの私の、この内面の真剣な思いというのでは、とてもそれは乗り越えていけない挫折感でした。それで鬱になっていきました。何かおかしい、あれだけ確かやと思って、真実やと思っていた、私はあの頃絶対にそう思っていたのに一歩世間に出たら、ものすごい力のサイクルと金という、このふたつが密接に結びついて、そのことに人間というのは動機付けられて動いているんだな、と。

極端に言うと本当にその絶望感というのが激しくて、完全に敗北したんです。鬱になり、その直後に東京から地元の京都に帰ってバイトを始めました。自分の言葉とか自分の身体を取り戻したいなと思って、肉体労働をしようとか、車の免許を取って生活を自分でコントロールするというのもう一度思い出そうと思って、がむしゃらにやり始めました。

自分を取り戻した親友の一言

その頃、もう一人女子高時代の親友も非常に悩んでいて、自分たちの悩みをシェアしていくうちに一緒に働こうということになって、製本屋さんでバイトすることになりました。作業台を挟んで向かい合わせになって、本にカバーをかけながら語っていたんです。ある時、その親友に「あなたのキーワードは女やで」と言われたんです。その時に電撃が走りました。「あなたはほんまに『女』が好きなんやろう」と言われたんです。ハッとあって、「そうやった、忘れてたわ。私はほんまに『女』が好きやったわ」と。

女って何だろうと思った時に、私の女像というのは確実に同志社の中高、女子校の中で

培ってきたものでした。もちろん自分の場合はレズビアンということで、そこにセクシュアルなことが介在していくということも恋愛の上ではありますけれども、それはあらかじめ役割が固定化されているようなものではないんですよ。「水位」が一緒なわけですよ、女同士というのは。そこで魂というものがむき出しになって相手と係わることができる、そういうことを女子校の中で感じ取ってきていたんです。表面的なことやお約束ではなく、魂と魂で人と繋がる、魂で気付ける、そういう観念的な言葉が肌で感じられる空間、その空間と女性たちに対する感謝ですよ。そして自分自身は女だけれども、女というのは実は自由な魂のことなんだ、ということ気付かせてもらった感謝。そういう「女」というものをもう一回取り戻したらいいんじゃないか、と言ってくれたんです。それで悩みが吹っ切れました。音楽業界ではヘテロセクシュアルの枠組みに取り囲まれていたから話がややこしかったけれども、私は同性愛者だし、その中で自分自身のパーソナリティが確実に築かれてきた。でもその過程で自分が学んできたことって、もしかしたら異性愛者の社会にとっても大事なものではないか、と気が付いたわけです。

その思いがソロデビューしてカミングアウトするところに繋がってきたんです。ノリとしては「レズビアンってめちゃくちゃいいんですよ」くらいの感じ。自分を卑下する感覚もないし、魂と魂の繋がりが合いで誰が卑下できるんですかと。魂と魂で語り合っただけでわかり合うみたいな、そういうような人間と人間の間を誰が差別できるのか、差別なんて言葉が思いもよらない空間なわけですよ。本当に幸せと喜びというものに満たされた繋がりが。そこで育まれている関係、愛というも

のを体験として知っているから、その悪いところがどこにあるんですかということ私には心から言えると思って、それがカミングアウトの原動力だったんです。

「ありのままの自分」に気づくだけでいい

しゃべりまくってしまいました。結論になりますけれども、非核三原則ってありますよね。核兵器を持たず・作らず・持ち込ませず。それを今回無理やり文字って考えた「比較しない」三原則。それはどういうことかということ、無理しない・卑下しない・押しつけない。無理しないというのは、やっぱり自分に正直になるということなんです。自分の内面、自分の体の声に耳を澄ます、そういう風に生きていくことによって初めて自分らしさというのが表に出てくる。

卑下しないというのはそれと同じなんですけれども、ありのままの自分をただ見つめるだけでいいんだと。何か悩んでいた、失敗したりしても、それを見つめて、傷ついて、ああ痛かったなと思って、抑え込んだりとかせず、それをありのままに認めて、それで調整していくということは、最初にありのままに認めるということからしか始まらない。隠したらあかんやんということですよ。そういうことで結局、無理しない、卑下しないってやってきたら、自分自身の本当の幸せとか、何が好きとか、自分はどういう人間なのかというのが、他人がどうあろうと自信を持てるようになってくると思うんです。そうしたら自分で自分に満足できているし、誰かを差別したくなるという観念がまったくなくなると思うんです。

「寂しさ」を見つめる

誰かを差別したり排除したくなる気持ちって、自分で自分を認められないというコンプレックスがあるからこそ、生まれてくると思います。だから頭ごなしに「差別はいけません」と言うことではなくて、それはそれで大事なんですけど、だけどやっぱり差別したくなってしまうというメンタリティはどこからきているかといったら、すごい「寂しさ」があると思うんです。何か満たされない、わかってもらえない自分がある。挫折感がある。深い悲しみがある。そういう内面を持った人間がそれを癒しきれずに成長してしまったところで、何か外側の権威を借りてきてそれを埋めようとする。自分はノーマルや、だから自分は大丈夫なんや。あいつらに比べたら自分はまともな人間なんやって、そういう風な回路でしか自分を成り立たせられないということがあるから差別をするということが生まれる。

でもそれは、人にわかってほしい、誰かに自分の傷を埋めてほしいという欲求を見つめて、自分自身で癒して、人と人との間でそういうものを素直にシェアして、魂と魂というもので感じられるところまでいったら絶対に差別なんてしたくない、本当にそんなことはなくなるはずじゃないかなと、私はカミングアウトをして思いました。

「自己実現」の先

例えば自分がカミングアウトすると親が悲しんで泣く。「なんでこの子はレズなんかになっちゃったんやろう」みたいな話って結構あったりします。でも、それはおかしくないですか。それはあなたの幸せの固定観念で

あって、私はこんな風に色々やってきて幸せやねんと。幸せというのは押しつけたらだめなんですよね。本当にそれぞれだし、人間の魂がどう輝いてどういう風な光を発するかというのはそれぞれ違うわけだから、それをひとつのことで、「幸せってこういうことやん」と押し付けるのは違うと思います。誰かに承認を求めるためでもなく、自分で自分をまず認めて、長所も短所も、ありのままを認めて、そこから湧いてくるやる気、満足というのが「自己実現」ということなんじゃないかなということをしごく思います。

私はレズビアンという立場ですが、みなさんにもそれぞれ色々なことで悩みがあると思います。けれども、悩みというのはチャンスでもあると思うんです。その悩みを通して自分自身をありのままに見つめていった先に、汚れない魂みたいな、つるつとしたビー玉がピカッと光るようなものが必ずあるので、そこまで下りていってもらったら絶対に幸せになれると感じています。私の話はここで終わらせてもらいます。最後に一曲だけ歌を歌って終わります。ありがとうございました。

【質問】

今日はオープンな講座ということで外部から来させていただきました。関西でセクシュアルマイノリティのセルフサポートをしている、コープというグループで運動させていただいています。今日のお話はすごくおもしろくて、聞きたいことがたくさんあるんですけど、ひとつキーワードとして女子校の話があつて、ふと思ったことですが、その中では魂の触れ合いがあったというお話で素晴らしいと思うんですけども、ヘテロセクシュアルの人とレズビアンの人がいた場合に、

ちょっとしたホモフォビア（同性愛嫌悪）が発生する要因として、レズビアンの人はずるいんじゃないかという風に思われてしまう可能性があるのではないかなと。

そのままの楽しい中での触れ合いを得られるレズビアンの人と、ここではこういう生活をするんだけど、学校を出た瞬間、違う自分を生きなくちゃいけないヘテロセクシュアルの人、それ自体の生き方がちょっと違うんだろうとは思んですけど、ただその中で、「あの人たちはちょっとずるいよね」というような、「ずるい感」みたいなものが発生するんじゃないかな、ということを僕はちょっと感じたんですけども、そういうことを自分で感じたりしたことはないのかなと思ひまして。

【回答】

ちょっとご質問の意味がいまいちわかっていないかもしれないですけど、ヘテロセクシュアルの女性からレズビアンがずるいなと思われることがありがちなんじゃないかということですか。正直言って、そんな風に感じてくれたら万々歳だなというようなところもありますよね。それだけ自覚的にヘテロセクシュアルの生き辛さというものを認識できているという、そういう女性がいるとすればそれは逆にすごく友達になりたいと思ひますね。

どちらかというとその生き辛さに蓋をして、本当は生き辛いはずなんだけれども、それを抑圧している状況でなんとか日々やり過ごしているというような人たちも多いと思うんです。だからその生き辛さをどんどん感じてもらって、そこから何か変えていくということは当事者のヘテロセクシュアルの中での問題としてはすごくあると思ひます。でも話

してみたいと思う人ですよ。そういう人であつたら、確かにこっちの方が楽という意味では「ずるい」かもしれないけど、「ごめんやけど、色々レズビアンやからこそ言えることはあるで」という感じで、シェアできるということも、もしかしたらあるかもしれないですね。そういう現場に突き当たったことにはないですけども。